

間違いを認める場

1. 教育を考える一言

「学校は間違えることのできる唯一の場だ」

2. 背景

たしか、小学校低学年の算数の時間だったと思います。ある児童が問題の答えを間違っ
てしまい、周りの児童に冷かされて泣いてしまいました。これは、そのときの担任の先生がお
っしゃっていた一言です。

先生は次のように説いていました。「きみたちは、家庭、学校という“社会”を経て、社会に
旅立っていきます。大人になってからの間違い・ミスは他の人に迷惑をかけてしまうことも
あるので、やはり社会に出てからの間違いはあまり許されるものではありません。でも、最
初から間違いをしない人なんていません。みなさんが勉強しているこの学校は、社会のなか
で唯一間違いが許される場です。そしてあっていることも間違っていることもみんなで共有
して高め合っていける場なのです。これから社会に出ていくまでに、いろいろ失敗して、そ
れを糧にしてより大きな人間になってほしいと先生は思っています。」

「間違えてもいい」というこんな簡単な言葉ですが、私はこの言葉を聞いたとき、世界が
明るくなったといいますか、世の中がさあ一つとひらけていくように感じました。「あっている
ことを答えなくてはいけない」という重荷から解放されたような気分でした。

3. 考察

学年が上がるにつれて、授業で自分の意見を発言することが少なくなっているのが現状で
す。なぜこのような状況になっているのでしょうか。間違えることや他の人と意見が違うこ
とが恥ずかしい、あるいは単に面倒くさいのか、授業の内容が難しくなったり、学校段階が
あがれば、指導の方法も変わったりしますが、それらが原因なのでしょうか。特に、算数・
数学では正誤がはっきりしているので、自信のない子が発言を求められたら苦しいもので
しょう。しかし、そもそも、なぜそこまで間違えることを恐れるのでしょうか。いろいろな疑
問が浮かんできます。原因のひとつとして、やはり間違いを認めない風潮が学校でも漂って
いるのだと思います。間違いを認めないのは、テストの点数を高くとるとか、有名学校に合
格するとか、本来の教育の目的とは違ったものが影響しているためでしょう。一度原点に戻
って、学校を、教育を見直してみましよう。これから社会へと旅立っていく子どもたちが間
違えることのできる、間違いから学ぶことのできる場として、学校という存在があるはずで
す。学校という小さな、しかし子どもたちにとっては大きな社会での教育の価値のひとつに、
間違いを認めることや間違いから学ぶことの大切さがあると思っています。

参考文献

蒔田晋治（作）/長谷川知子（絵）『教室はまちがうところだ』子どもの未来社、2004年